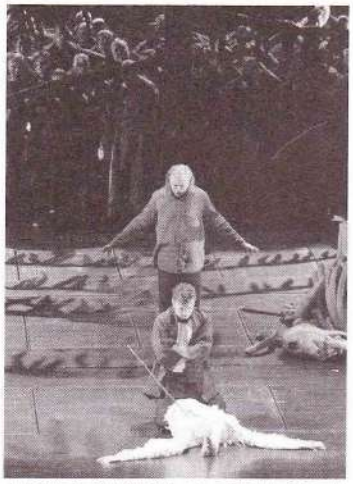
Opera カウフマンらスター・キャストによるK.ペトレンコ初の《パルジファル》

バイエルン州立歌劇場の《パルジファル》を観た。

序曲の1番目のフレーズをキリル・ペトレンコが柔らかく膨らませた時から、これからの5時間が素晴らしい体験になるだろうという確信を得た。それほど色彩豊かで雄弁なオーケストラは、現在のトップ・キャストを集めた歌手陣よりも複合的に歌い上げていた。このオペラを初めて指揮するというペトレンコが、宗教的荘厳さにモダン色を加え、マーラーやバーンスタインまで彷彿とさせるような、現代にまで続く世界を創り上げたことに感嘆を覚えた。

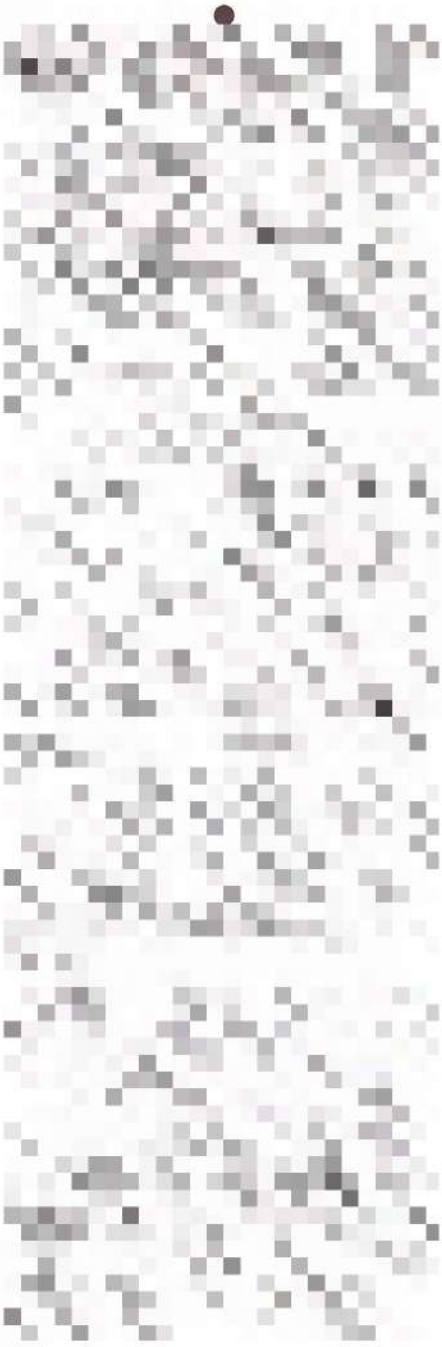
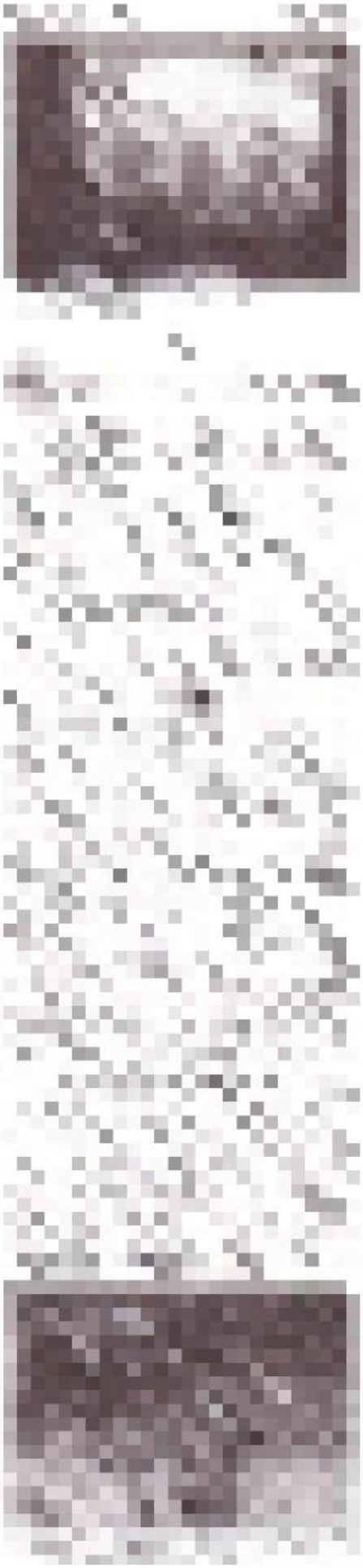
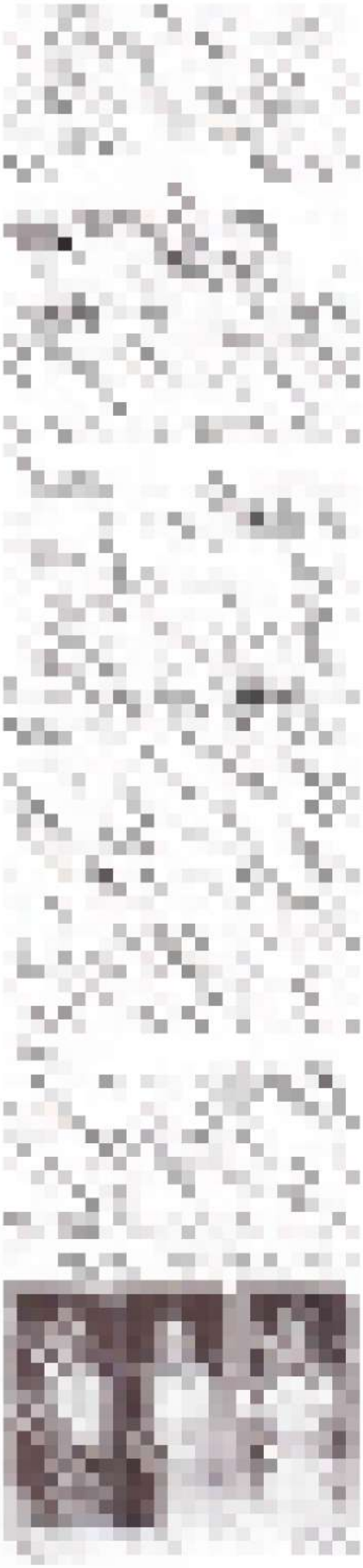
クリスティアン・ゲルハーヘルのアムフォルタスは、少々明る過ぎる響きだが、立ち姿だけでも苦悩と疲弊を表す体当たりの表現だった。ルネ・パーペのグルネマンツは、最初は完璧と思わせるのだが、弱音や高音が弱く、最大の問題はフレーズを引っ張って行く力が弱い点だ。ヨナス・カウフマンの題名役は、自



上はグルネマンツ役のパーペ、下はパルジファル役のカウフマン ©Wilfried Hösl

Scramble Shot

然で、美声も音楽性も光る出色のはまり役だった。ニーナ・ステンメも、強弱を自由自在に使える効果的なクンドリーを歌い上げた。男性陣がすべてドイツ人歌手だったのも、美しい独語歌唱のお手本のようだった。

ピエール・アウディの演出や、著名な画家ゲオルク・バゼリッツの舞台美術も効果的だった。初日から3回目となる7月5日の公演を聴いたが、その次の公演はライヴ上演がオデオン広場の大スクリーンに映し出される「Oper für alle」、そしてライヴ・ストリーミングと、翌日のオンデマンドでも世界中に公開されたというが、それに値する公演であった。

（中 東生）